

せなかむし

発行・古平町史編纂委員会
編集・古平町史編纂室
第三十二号（一日発行）
平成四年五月一日

郡長・北川誠一について

近藤 芳一

古平町の行政を語る時、郡長・北川誠一は重要である。彼はあるかという点については定かではないが、非常に長期間にわたって、明治初年の古平町の行政に深くかかわりを持った郡長である。

郡長は『天保十年八月十八日ニ、武蔵国豊島郡牛込赤坂下ニテ出生』と記録されている。身分の低い武士の息子であった。（孫の談話から）
古平との関連を簡条書きにする。と次のようになる。
■明治元年 開拓史小主典として海関所掛りとなり、開拓史の役人となる。
■明治三年 古平詰を申付（出張所の役人）
■明治四年 古平詰差免

■明治七年 古宇郡在勤申付け
■明治十三年 小樽・高島・忍路・余市郡長兼・古平・美国・積丹郡長（札幌県）
■明治十五年 任札幌県・小樽・高島・忍路・余市郡長兼・古平・美国・積丹郡長（札幌県）
■明治十六年 免兼古平・美国・積丹郡長
■明治十七年 非職申付候事
古平在勤中に、次のような功績で開拓史より賞与を受けている。『明治七年十月二日、暴風雨之節該郡前浜繫泊の商船破損及び数多ノ船子怒濤に溺シ危急ノ場合指揮行届一同助命相成り段奇特ニ付為賞与金千疋被下候事』（開拓使）
郡長は、東京からの単身赴任であった。彼は北海道勤務にな

って以来一度も東京の実家に帰っていないからではないか。（孫の談話）しかし、東京の家族には生活費を送っていた記録が残っている。

大正の大震災前までは、東京の家族と文通はあったようであるが、震災以後は全く連絡がとれなくなった。（孫の談話）

彼は北海道で、ある藩の御用商人の娘と再婚している。二人

岡田家の積み荷の記録から

当時栽培とされていた野菜類

安政五年（一八五八年）、当時古平場所の請負人であった岡田家の仕入れた物品の記録に、野菜の種子が載っている。

練馬大根一升・かぶ一升
たかな 二合・夏大根 一合
きうり 一升・ゆうがお 一合
しそ 一合・なすび 一合
かぼちゃ 一合・ねぎ 一合
とうがらし 少し
また、翌年出版された本によるとフルヒラの戸数は五四戸、人口は二四一人（男一一六人、女一二五人）とあり、この人数から見ると随分少ないが、当然のように、昔からの山菜が主だ

の間に子供がなかったことから古平在勤中に同町の『三浦家』より女の子をもらい受け養育した。後に結婚したが、退官後は若夫婦と共に小樽で醸造業を開業し、三人の孫（男一、女二）に恵まれたが、娘夫婦が早世し三人の孫が残った。間もなく男の孫（二十歳ごろ）が病死し、二人の孫を育て彼は小樽で生涯を終えている。

だったのだろう。

これから山菜の季節を迎えるが、昔の人にとって山菜は生活の必需品だったのである。

4月の日の出と日没

月/日	日出	日没
4/1	05:20	18:01
10	05:04	18:12
20	04:47	18:23
30	04:32	18:35

北緯 43° 15' 45"
東経 140° 38' 35"

薔薇の戦場に舞う

五・十円札にピンチ

無線連絡の合間に聴く敵側のラジオ放送は、日本の議会でのこと、国内の生活のことなどを流しては、兵隊に呼びかけてくる。それらの宣伝活動のアナウンサーの使う日本語は、きれいな発音で、まるで日本人がしゃべっているようだった。そんな日本語が、受話器を通してジャンジャン入ってくる。最後は必

故郷の想

うゝ浜井士平

「降伏」をしようといひ、懐かしい名曲が流れてくる。記憶では、メリーウイドー、ほたるの光などが聞こえてきた。それから二、三日したら敵機が大挙して襲ってきた。そして爆弾かと思つたら、何と空から降ってきたのは日本の札であった。大量に投下されて、友軍の陣地にバラバラと降つて来た。間違ひなく紙幣（十円か五円）である。ただしニセの紙幣であ

る。表面は本物とそっくりの印刷だが、裏にはこの十円でお米が何俵買えるとか、お酒が何升飲めるとか、燃料がどれだけ買えるとか、また、財閥や議会のからくりなどが書いてあった。間もなく伝令が飛んで来て、「見るな、見せるな、持つな」という厳しい命令だった。記念に持つて帰ろうと思つたが、明日の命さへ分からぬ身のこと、これは実現しなかつた。それにしても反戦放送は別として、ソ連の音楽は、よくこっそりと盗

聴しては楽しんでた。曲目は何となくえん（厭）戦気分になるような、美しい平和な曲ばかりで、まぢがつても士気を鼓舞するようなマーチは流れてはこなかつた。

今でも不思議に思うことは、戦線で、わが友軍である内蒙古軍、満州国軍とはついに一度も会う機会がなかつたことだ。逃走したのか、捕虜になつたのかわからないが何の援軍もなかつ

た。ただ満州国内から徴発された車両が、あの広い戦場に焼け残っているばかりだった。夜になると寒い日が続いた。そして原因不明の下痢が止まらず閉口

『産業戦士』といわれて石炭掘り

十古平町 産業戦士挺身隊員として出炭坑へ

若石 松 定 衛 (談)

戦争中は『徴用』というものがあつて、兵隊と同じにどこへでも連れて行かれた。物が無くて商売の出来なくなつた人なんかは町の挺身隊員になつて、農家や炭坑、飛行場つくりにつ引張られた。ここの稲倉石に働きに行けば徴用はなかつた。

昭和十七年十月、農家の人が多かつたが、古平から二十人が挺身隊として夕張炭坑へ行くことになり、わしが古平農事実行組合から責任者に指名された。炭坑で働いた経験のあるのはわしだけで、後の人はみんな初めてだった。仕事は坑内に入ってトロッコで石炭を運んだり、坑内の雑用だった。初めての人は坑内に入ると気味悪がついて、慣れないうちはそんなも

した。それでも不敗を信じ、名誉を重んじて、命令されるままに一兵卒として従軍できたことが、どうあれ私の青春の歴史である。

んだ。仕事は一日三交替で、三度の食事は米の飯でまあいい方だった。一週間に一回ぐらいたつたか、お神酒ぐらいの酒が出た。炭坑では割と物は豊富にあつたようだったが、作業用の着るものまで自分持ちだった。百日間働かないと家に帰れないので、炭坑で正月をした。正月に実行組合から、石井さんと沢口さんの二人が土産を持って慰問に来てくれた。

炭坑から帰つてから、挺身隊に行くのも同じ人ばかり行くので役場にかけて合に行つたが、さっぱりラチがあかないので警察に行つた。そしたら、「お前そんなこと言つて、日本が戦争に負けてもいいのか！」と言われて帰つてきた。

男勝りだった 彼女の青春

—幼なじみのツマちゃん—

池田 テル

「山の神のツマコ」という名前を聞いて、「ああ——あの威勢のいい娘か」と、懐かしく思い出される人がまだ多いのではないだろうか。何か不思議な存在であったように思わせるものがありましたので、少し書いてみることにしました。

ツマちゃんは私の家の近所でしたから、幼いころから「ツマちゃん」と呼んではよく遊びました。大正の末に小学校へ入学の日、先生が一人一人の名前を呼んだ時、はじめて「木村」という姓であったことを知りました。ツマちゃんは、「山の神さ

ま」をまつておられたおばあさんの孫さんなのです。ほとんどの人は家に帰ると、「山の神のツマコ」と呼んでいました。五年生のころ、両親が離れて行かれ、霊感師のおばあさんと妹さんとの三人になり、飼っていた馬の世話はずマちゃんがいなければならなくなりました。それから急いで学校から帰るとすぐ鎌を持って馬の草を刈りに行き、それを切っては馬に与え、手入れなどツマちゃんに託って忙しい日々が続きました。そのうち彼女は馬に乗り始めたのです。馬を洗いに海へ行く

積丹半島へ 鉄道敷設を (八)

不況と戦乱で遠く鉄道への夢

町民が待ち望んでいた祝賀の花火も不発に終わったが、中には駅舎などの建設を予想して、土地を物色する人まで現れたという。期成会ではこれに気落ちすることなく、さらに実現に向けて陳情などの運動を続けた。昭和三年も押しつまった十二月、鉄道省会議が開かれそこで

のに町の中を通るのを見て、町の人たちはびっくりしました。「山の神のツマ子が馬に乗ってる」「見たか!」。いつの間にかすっかり評判になってしまいました。そして「男おなご」とか「男ジャツバ」という陰口です。私はツマちゃんがかわいそうでしたが、無理もないのです。そのころ女が馬に乗るなんて、まったく破天荒なことでしたから。女は着物姿で町を歩くのに、若い娘が印半天を着て、乗馬ズボンをはいて馬にまたがっていくのですから、「山の神のツマコ」の名前は、町の名物

余市・余別間の鉄道が予定線に昇格された。この決定は花火を打ち上げて待ち望んでいた町民に伝えられ、再び町を挙げてこの決定を祝った。予定線に昇格が決定してからは早期の着工をめざして、国会への請願や関係当局への陳情にも一層熱が入った。しかし当局

のようになってしまいました。色白のきりっとした顔だちで、気だての優しい彼女は、初めは恥ずかしそうでしたが、やがてそれがすっかり板についてきました。そして十九才の時、そのころまだ珍しかった自動車に驚いた馬から落ちて、大けがをしたことがありましたが、町の人たちからは働き者とほめられ、親孝行な娘だといわれるようになっていました。

普通の人にはなかなか出来ない青春を送った彼女は、のち相愛の人と結婚して二男二女の母となりましたが、現在は七十七才。五十余年を経た今も、昔を知っている人には忘れ難い思い出のある人で、「山の神のツマコ」と呼ぶ方が、なんとなく親しみを感じさせる人でした。

からは、「現在のところは鉄道の復旧工事が優先し、その完成後でなければ新線は認められない」という状況であった。当時道内の鉄道の主な幹線はすでに完成し、その幹線をつなぐ支線もほぼ敷設されていて、行き止まりの路線は私設鉄道が主となっていたのである。

『後主心状況報文』より

二十世紀初めの古平郡

明治三十三年は西暦一九〇〇年で、文明が飛躍的に発展した二〇世紀の始まりでもある。

ちょうどそのころ、全道の植民状況について調査した中に古平郡がある。その報告書に他の資料をつけ加えて、当時の古平の様子を見てみたい。

地理は東は岩内郡・余市郡に接し、西は古宇郡・美国郡に隣り合っている。北は海に面し、東西三里二十五町、南北六里十二町、面積十二方里余、海岸二里二十町である。

余市郡境には、やや高い山々がつらなり、八内・天狗・湯内などの山が目立っている。古平川は余市郡境から流れ、多くの溪流を集めて郡の中央を北に流れ、古平市街と沢江村との境を分けて海に注いでいる。長さ七里二十三町、川口の幅五十間あるが、水が浅くして船の便はない。

海岸は古平川口はやや開いて砂浜であるが、その他は背に山を背負って幅が狭く、わずかに

道が通っている。

東西の三方は山に囲まれ、古河畔にわずかに肥沃な農耕地があるが、その他は農耕に適さない。

樹木はカバ・タモ・コナラの類が多く、奥に入るとマツ・カツラなどがあるが、部落付近の山は野火あるいは乱伐のため、今は赤はげとなり、三、四里の奥に行かないと良材は得られない。

い。

気候は近くの郡と変わらないが、霜は十月上旬より見られ、五月上旬に終わる。雪は十一月初旬に降り、四月下旬に解け、積雪は三尺四、五寸である。風は冬季は西北の風が強く、夏季は東南風が多い。そして西北風は（俗にヒカタ）は鯨漁に害があると云う。

道路は余市郡より本郡各町村を通り、美国郡に連絡している。郡内の道路は平坦であるが車を引くには適当でない。また古平湾は、丸山岬が西北

【今日はこんな日】

感激のこの日五月十八日

血涙の請願遂に實を結ぶ

[昭和28年]

当時の古平広報はこんな見出しでその喜びを表わしている。

道路法が改正になり、それまでの路線は一応ご破算になり、新たに国道となる路線を認定することになったので、全国の市町村はそれこそ火の出るような陳情合戦をくりひろげていた。も

にあつて波浪をさえぎり、湾内が広く、水深が深く、良い碇泊場である。冬季のほかは、毎日小樽へ二隻の小きせんが定期航海をしている。海産物輸送の季節になると船舶が多く集まり、湾内はにぎやかになる。

——つづく——



化の交流も道路の完備が先決問題であることは、古平の現状を考えればわかることである。

やがて待ちに待った路線を指定する政令は、五月一日ついに公布になり、念願の二級国道に認定されたのである。

「一年有半にわたる血涙の陳情、請願の足跡を想起する時、感激また新たなものがあります。この喜びこの感激は、各関係住民各位の喜びであると思うのであります。（略）」

当時の伊藤町長はこのように挨拶を紙上で述べている。これにより、古平は言うに及ばず、積丹半島の発展は一層加速されることになったのである。